

「2006 日仏景観会議・柳川」開催によせて

2006 日仏景観会議「柳川会議」実行委員会
会長 立花 民雄（柳川市観光協会会長）

「2006 日仏景観会議・柳川」を11月4日、5日の二日間、水郷の町として知られる福岡県柳川市で開催できる運びとなりました。

柳川は有明海の湾奥、そして九州最大の河川・筑後川、さらにその南にある矢部川の最下流に位置します。

太古の昔よりこの両川とともに、有明海の潮汐作用で運ばれる膨大な、しかも極微粒の泥土が広大な干潟を形成してきました。先人たちは、この干潟に堀を掘り、環濠を作り雨水真水をためて、生活の基盤を営々として築いてきました。やがてこの堀は、稲作を中心とする集落の発展とともに、お互いに繋がって大規模化していきます。牟田、溝、沼など湿地を指す地名がたくさん残っています。筑後川、矢部川からの導水利水はずっと後世になってからです。

戦国期になると、次第に柳川は戦略上重要なところとなり、蒲池鑑盛、田中吉政、立花宗茂などの諸大名の城下として整備されていきます。この城下は源流のない沖ノ端川、塩塚川の間で作られます。正確に言えば、源流は有明海です。

この二つの川は、有明海の満ち潮が押し寄せて上って行き、干き潮の時は干上がってしまう溝だったのです。これがいわゆるクリークです。このクリークと矢部川をつなぎ、さらに堰を設け城下へと導水する運河を掘り、城下町発展のインフラ整備へとつながります。

当市は、今も昔も、有明海が満潮時は、水面下となります。唯一、先人たちが築いてきた河川堤防と海岸堤防に守られているのです。しかしながら、海岸堤防の地先には、太古の時と同じように泥土が積もり、陸地より海底のほうが高くなっていきます。これを放置すれば、大変危険な状態になりますので、沖合いに新たな堤防を築かざるを得ないわけです。こうして、干拓堤防が防災を兼ねて築かれていきます。

平和な江戸時代になると、計画的に干拓が行われ、新田開発が盛んに行われます。ちょうど魚の鱗のように鱗片状に広がる干拓の風景が形成され、400年前に城下町が作られたときに比べると、全くの埋め立てなしに、今では2倍以上の広がりになっています。

当然のことながら、新田開発には水の確保がなされなければなりません。頼りとする矢部川は、総延長が60キロメートルしかなく急峻で、大雨が降れば洪水、日照りが続けばすぐに水不足となる川です。最も恐ろしいのは洪水です。有明海の干満の差は、この湾奥の柳川では大潮のとき6~7メートルあります。有明海の水位が、陸地の堀より下がるまで排水ができないので、「もたせ」という遊水機能と同時に、一時的にも貯水しておくためにたくさんの堀割が必要なのです。旧市内だけでも総延長470キロメートル、市街地面積の20%が水路と言われていました。

さらに、干潟の上の生活ですから、浅井戸は塩分で使えないし、深くても有明粘土

層という水分 90%の豆腐状態の地盤です。地下水を汲み上げたら、確実に地盤沈下を起し、二度と復元できないのです。

一番重要な生活水として上流も、下流も、全員が堀割を生命線として利用してきたので、決してこれを汚すことをしなかったのです。そして、唯一水を浄化できる緑や土を大切にしてきました。

水郷柳川と呼ばれる今日、豊かな水がいつでもあるかのように思われるでしょうが、それは水に恵まれない土地で悪戦苦闘、試行錯誤の繰り返しをしてきた、先人たちの労働の風景であるし、苦労してきたゆえの生活の知恵、すなわち「水文化の景観」なのです。

全国で景観が問題提起され、各省庁の景観法まででき、それを守らなければならない時代となりました。

景観とは、人の営みの結果としてできるものであり、作るものでも守る事でもないと考えます。が、では、なぜ今問題なのでしょう。

当地では、「柳川らしさ」その「らしさ」が薄れ、無くなっていく姿に、不安を感じ始めたのではないのでしょうか。自慢する風景や、伝統的な仕事や祭りがだんだん無くなる、こんな筈じゃない、どうも何かが違う、変わり行く風景に戸惑いながら、説明、納得がいかない。このままでは、柳川人としてのアイデンティティーが喪失しかねない。不安と危機感を持ち始めたのだと思います。

柳川だけにとどまらず、全国的に景観が大変化したのは、歴史的には30~40年です。変わるからこそが近代化と信じて進んできました。しかしながら、一番変わってはいけなかった「生活の知恵」という、何百年もかかって築き上げてきた体験上の思想、哲学に基づくまちづくりまでもが変わってしまいました。柳川は、大地そのものが人の手によって創られ、自然や水が活用できるようになって初めて、人の暮らしがその上に成り立ってきた「超スローライフ」のまちなのです。

「日仏景観会議・柳川」のメインテーマを「堀割景観の創生」、サブテーマを～見直そう！水と人とまちの関わり～としました。

現代の子供達は、お堀や田んぼや自然の中で、遊びや仕事の手伝いを通じて学ぶことは、普段の生活で極端に少なくなりました。水やまちとの関わりが益々薄れてゆきます。

本会議に先立ち、プレワークショップと題して、現地学習を8、9、10月に3回開催します。子供の参加も期待します。

また、前夜祭として、オプションですが11月3日には柳川が生んだ詩聖・北原白秋祭の大変魅惑的な夜の水上パレードもご乗船いただけます。

11月4、5日のまち歩きは堀割探検です。御家中、町人町、獵師町の3コースに分かれ、舟と歩きによる探検です。

主な講師は、九州大学出口教授のコーディネイトをお願いし、フランスよりランドスケープデザイナーのアルフレッド・ペテール氏。九州大学菊地成朋教授、同島谷幸宏教授（東京会議）の方々です。九州大学、日仏景観会議協議会、当実行委員会、関係スタッフの英知を結集して、大人にとっても子供にとっても、もっともっと魅力的な堀割、町並みの創生のスタートといたたく願うものです。